

彫金 一桂 盛仁のわざー



ちょうきん たがね

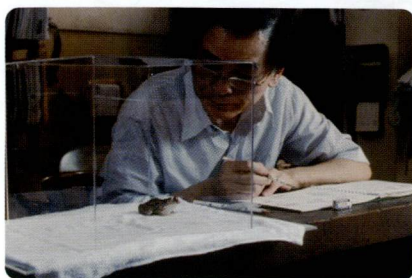
彫金は、鑿などの道具を用い、金属の素地を彫ったり打ち出したりして造形・装飾する金属工芸技術である。日本には、弥生時代に中国大陸から伝播したといわれ、その後仏具や刀装金具の制作技術として高度に発達した。明治の廃刀令以降、その技術は、装身具や什器の制作技術として今日に受け継がれている。

平成20年に重要無形文化財「彫金」の保持者に認定された桂盛仁は、伝統的な彫金技法を駆使した小金具の制作を得意とする。本編は、桂が、トノサマガエルをモチーフにした帯留金具を制作する工程を記録したもの。デザインの構想から各種鑿を用いた高肉打ち出しと各種象嵌、煮色着色に至る全工程をカメラが捉えた。



桂 盛仁 (かつら もりひと)

- | | |
|-------|--------------------------------------|
| 昭和19年 | 東京都文京区に生まれる |
| 昭和35年 | 父・桂盛行に師事 |
| 昭和43年 | 武蔵野美術短期大学卒業 |
| 昭和50年 | (公社) 日本工芸会正会員 |
| 平成7年 | 第25回伝統工芸日本金工展文化庁長官賞受賞
作品「さくらんぼ金具」 |
| 平成10年 | 第45回日本伝統工芸展東京都知事賞受賞
作品「打出し香爐「森閑」」 |
| 平成20年 | 重要無形文化財「彫金」(各個認定) 保持者 |



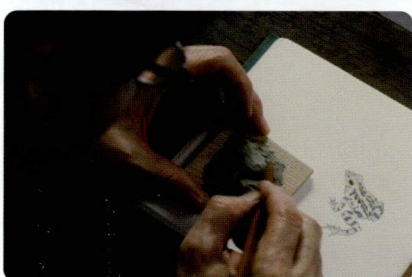
◆ 彫金作家 かつらもりひと 桂盛仁

桂盛仁。平成20年度認定の重要無形文化財「彫金」(各個認定) 保持者、いわゆる人間国宝である。



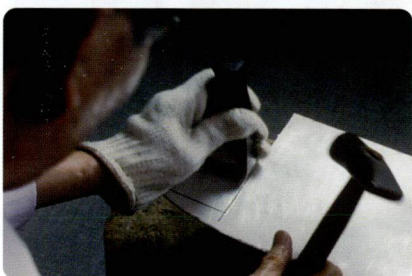
◆ 作品「打出し香爐「森閑」」うちだ こうろ しんかん

桂盛仁作「打出し香爐「森閑」」。様々な彫金の技法によって森の静かな情景が描かれている。蓋(火屋)にはミミズクをつまみ。裏を見るとこのミミズクが一枚の板からできている。「高肉打ち出し」の技法による表現である。たかにく



◆ 構想・粘土型

原図から、粘土原型を制作する。
今回桂が造るのは、高肉打ち出しの帯留金具。おびどめかなぐ出来上がりの形、大きさをこの時点でしっかりと決める。



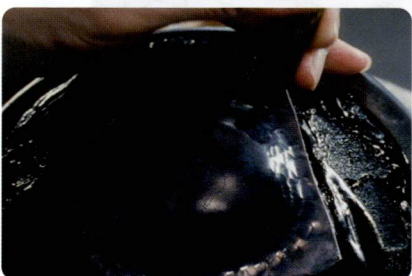
◆ 素材 し ぶ いち 四分一の板金を使う いたがね

使用する地金は、し ぶ いち四分一。
銀四分の一に対して、銅四分の三、これにわずかな金を加えた日本独特の合金。硬く、加工しにくいですが、独特の風合いが好まれ、江戸時代から彫金の素材として用いられてきた。



◆ う だ 打ち出し

最初の打ち出し。
木の鑿は、たがね大きく打ち出すことができ、しかも地金の厚みを変えない。



◆ にく と 肉取り

カエルの輪郭に沿って金属を寄せる。
これを「肉取り」という。下から上へ、中央に寄せるように打ち上げて地金を厚くしていく。



◆ 打ち出しと腰寄せこしよ

打ち出す。十分な高さになるまで、これが繰り返されていく。カエルの腰や目は高く、足を低く落とす。叩く場所に合わせて鑿の大きさを何度も変えながら、肉付が進んでいく。



◆ 鑿の紹介たがね

さまざまな鑿を使い分け、カエルの細部を造形したり、表面を整えたりする。鑿には、多様な形と名称があり、鹿の角鑿、なめくり鑿、造り鑿等と呼ばれている。



◆ 彫金技術の歴史

彫金は、武士の刀の飾り「刀装金具とうそうかなぐ」の制作技術として発展を遂げた。

室町時代、後藤祐乗ごとうゆうじょうは、黒く発色する赤銅しゃくどうと金を効果的に使って武士の美学を表現した。



◆ 肉付けにくづ

溝を打つために使う「なめくり鑿はたかね」で端金とカエル本体との境界を締める。そこから、本体のまわりに「腰こし」と呼ばれる立ち上がりをつけて立体感を出す。



◆ 腰切りこしき

複雑な形と高低差のあるカエルの立体が姿を現すと、板金の余計な部分を切り離す「腰切り」の時を迎える。

カエルが一枚の地金から求める形になって飛び出す。ようやくこれで制作工程の折り返し地点に辿り着いた。



◆ お掃除 やすり・きさげ

腰にやすりをかける。裏から地金の厚みを確認し、削りすぎないようにしなければならない。

仕上げは、きさげで表面をなめらかに削る。脚や背中たがねめの鑿目を均す工程を「お掃除」と呼ぶ。



◆ 象嵌工程(1) カエルの模様を彫る

油性ペンでカエルの模様を描き、その部分を鑿で彫り下げて溝をつくり、そこに紋金と呼ぶ種類の違う板金を嵌め込む。これが平象嵌ひらぞうがんの技法。



◆ 象嵌工程(2) 二重象嵌

背中に大きめの赤銅を平象嵌し、さらにその上に金を平象嵌する。象嵌の上に象嵌を施す二重象嵌の技法。

地金の四分一まで掘り下げてしまわないように、わずかな厚みを探りながら、はつっていく。



◆ 炭研ぎすみと

朴炭ほおずみという研ぎ出し用の炭を使って、表面のやすり痕を研ぐ。さらに柔らかく目の細かい桐炭きりすみで朴炭の研ぎ痕を消すように研ぎ上げる。



◆ 色上げ

作品の表面を大根のおろし汁で洗ってから、硫酸銅ろくしょうと緑青にいろちゃくしよくを溶かした液体で煮色着色する。化学変化により金属が美しく発色する。



◆ 「殿様蛙帯留金具」完成とのさまがえるおびどめかなぐ

日本の伝統的な彫金の技によって生まれた桂盛仁の「殿様蛙帯留金具」。

四分一の魅力。それは渋く、重厚感のある上品な色合い。そこに象嵌された金、銀、赤銅の色が冴える。

協力 東京国立博物館 国立国会図書館

スタッフ 製作 / 佐藤哲夫・佐野文男 構成・演出 / 有泉寧 撮影 / 大木大介 照明 / 古屋熱 撮影助手 / 藤原千史
助監督 / 牛込政雄 音楽効果 / 山崎茂之 タイトル / 鶴岡秋育 ミキサー / 門倉徹 ネガ編集 / 長沼ヨシコ
タイミング / 三橋雅之 録音 / 東京テレビセンター 現像 / IMAGICA ナレーター / すまけい